

-51- Radioimmunoassayによる消化管ホルモンの検討 第Ⅱ報 SecretinのRadioimmunoassay

東京医科大学 がんセンター核医学部
○森山昭子 村山弘泰 岡本十二郎
第四内科
原田容治

我々はかねてより血中Gastrinについて報告してきたが、消化管ホルモンは種々のホルモンをかね合せて検討する必要がある、今回は血中SecretinについてRadioimmunoassay法による基礎的検討を試み、2、3の知見を得たので報告する。

抗血清はエーザイより提供された6000倍、標識SecretinはSchwarz-Mannの6-Tyrosyl Secretin、標準Secretinは抽出精製Secretinを使用した。

血中Secretin濃度を測定するためにはpg/ml単位の標準曲線が必要であるが、今回はその前段階としてng/ml単位について行った。

抗体稀釈濃度、incubation時間、One-step法、Two-step法、添加蛋白濃度と吸着率、Trasylol添加について、それぞれ標準曲線を作製し比較検討を行った。

その結果、蛋白濃度2.5%の1/15 M pH 6.4 phosphate Bufferを使用し、抗血清は4000倍、Trasylol添加、Two-step法にて行い、ng/ml単位では測定可能な標準曲線が得られた。現在、第二段階としてさらに微量域での標準曲線を得るべく基礎的検討を行っているので合わせて報告する。

-52- イムノラジオメトリック法による抗DNAキット

の基礎的および臨床的検討

神戸市立中央市民病院 臨床病理科
○ 森本義人、大城徳成、水田 亘
同 内科
森 徹、上野謙三、高山英世

全身性紅斑性狼瘡 (SLE) の診断には従来LE細胞、LEテスト、抗核抗体などが用いられていたが、最近抗DNA抗体の検出に注目が向けられ、H-3を用いるラジオアッセイも開発されたが、特異性や簡便性に問題が多かった。今回我々はI-125標識DNAと血中抗体の結合物を硫酸で沈殿させるイムノラジオメトリック法による抗DNAキット (科研) について基礎的ならびに臨床的検討を行ない本法の有用性を認めたので報告する。

基礎的検討としては、採血時のヘパリン、クエン酸ソーダ添加の影響、血清保存の影響、高抗体含有血清の希釈系列と標準曲線 (従来の%沈降放射能ではなく、本法では標準物質が添付され、相対的力価が得られる) との平行性、血清非飽和の影響、再現性などについて検討を行なったが、抗凝固剤添加血漿では血清よりも低値の成績が得られた。

血清保存による力価の低下は短期間の冷蔵保存ではみられず、また本法のイントラアッセイ、インターアッセイの再現性は良好であった。さらに、高力価血清の希釈系列は標準曲線とはほぼ平行し、本法の安定性が認められた。

現在までに79例の患者および正常人血清について測定を行った。健康正常人14例はいずれも10 u/ml以下とした。

各種疾患患者65例のうち25 u/ml以上を示したものは12例で、SLE以外で高値を示したものは PSS および汎血球減少症の各1例のみであった。10~25 u/mlの境界値は18例にみられ、10 u/ml以下が35例であった。対照患者の内訳はSLE22例、

DLE 1例、RA 7例、PSS DM ITP など8例、橋本病およびバセドウ病6例、その他各種疾患21例であった。同一血清について検討した抗核抗体、LE細胞、LEテスト、RAテスト、サイロイドテストなどの成績との比較においては抗DNA抗体以外のいずれの成績もSLEに対する検出率と特異性を併わせると本キットの成績におよばず、しかも本法のSLEにおける成績は臨床経過の良い示標でもあり、極めて満足すべき成績であった。

以上、抗DNAキットは安定性、再現性の高い測定法であり、しかも本法の検出成績はSLEに特異性が高く臨床治療の良い示標でもあり、今後ルチン検査として広汎な利用に好適であると考えられた。